

大正ロマンの生んだフェミニスト： 山田わか・嘉吉の協働と思想（その1）

齋藤 理香

1. はじめに

山田わか（1879-1957）と言えば、20世紀初頭に日本のフェミニズム運動のさきがけともなった『青鞥』の書き手、またいわゆる「母性保護論争」の論客の一人として、その名が思い起こされる。戦前から婦人問題の評論家、新聞の人生相談の回答者などとして一般にも親しまれ、第二次大戦前から戦中にかけては、その徹底した母性保護主義思想が国家主義の主張に絡め取られはするものの、戦後は社会福祉事業に熱心に取り組んだことなどでも知られている⁽¹⁾。

わかの夫、山田嘉吉（1865-1934）は、妻わかには比べると、その活動の軌跡を辿るための資料がほとんどないに等しいのだが、わかを評論家として大成させるべく、まずは読み書き、さらには西洋の思想・文化・学問を教え込み、生涯、彼女の最愛の伴侶にして師匠として、影になり日向になり、彼女の文筆・講演活動を支え続けた人であった。むしろ、自分は黒子に徹し、妻を表舞台に送り出すことを生きがいとしていたらしい⁽²⁾。

夫に尽くす妻の役割が強調された時代——たとえ近代化によって女性の自我の目覚めと社会的権利の要求が叫ばれるようになった時代でもあったにせよ——、その役割を逆転させたような夫婦というのは稀有であったろう。その点で、山田わか・嘉吉のカップルは当時も、今日的な意味でもフェミニストであった。

この小論は、そんな二人の時代を超えたフェミニストぶりを讃えるということに加え、後述するが、これまで「一心同体」と称されることの多かった山田わか・嘉吉の「協働関係」について、もう少し仔細な考察を試みようとするものである。ここでは、私が目に触れる機会を得た、嘉吉とわかによる未公開の往復書簡——1922年の半年間、嘉吉が日本を離れていた

時期に二人の間で交わされた——、またその留守の期間に発行された雑誌『婦人と新社会』の記事を中心に、わかと嘉吉の協働および彼女の思想的自立について考えてみたい。今回は、「その1」として二、三の材料を提供するに留めるが、これを今後さらに研究を進めていく足がかりにできればと考えている。

2. 二人は「一心同体」

山田わかの前半生は「新しい女」として同時代を生きた『青鞥』の女性たちと比べても、異彩を放っている。神奈川県の農家に生まれた8人の兄弟姉妹（一人は幼少時に死亡）の一人だった浅葉わかは、向学心をもった活発な少女だったが、農家の娘に学問はいらぬと、小学校は3年間通っただけで、読み書きも満足に習わぬまま就学の機会を閉ざされてしまう。生家の経済状況が傾いてきた頃、父親の意向で17歳で資産家と結婚するものの、あてにしていた婚家から実家への経済的援助が得られず、結局1年あまりで離婚、その後、仕送りの手段を求めて横浜に赴いたところ、女衞にだまされ、18歳の時にアメリカに売られてしまうのである。着いた先、ワシントン州シアトルで6年近く苦渋を舐めた生活を強られるが、そこを逃げ出し、辿り着いたサンフランシスコでは婦人保護施設キャメロン・ハウスCameron Houseに身をおきながら、次第に自らもそこで自分と似た境遇の女性たちを救う手伝いをするようになる。

わかが将来著述家となる、その潜在能力を発揮するきっかけとなったのは、わかより10年以上も前に移民としてアメリカに渡り、やはり苦勞を重ねながら独学で知識や教養を身につけ、サンフランシスコで私塾を開いて教えるまでになった山田嘉吉との出会いだった。後に彼の私塾に通うようになったわかは、彼の指導で語学や社会科学などの勉強を始める。そのうち二人は結婚。1905年、わかが26歳、嘉吉が40歳の時であった。二人は翌年日本に帰国し、わかはしばらくして『青鞥』で翻訳を発表し、文壇デビューを飾る。その後も執筆の機会を増やしていったわかは、彼女の個人誌として1920年に夫婦二人で創刊した『婦人と新社会』が始まるまでには、

いっばしの女性評論家として世間に知られるようになっていた。出会って以来、わかには嘉吉から間断なく知識の伝授がなされていた⁽³⁾。

嘉吉は、日本に帰国後も、外国語や社会学を教える私塾を開き、そこには平塚らいてうをはじめとした青鞥のメンバーや大杉栄なども通ってきていたのだが、そもそも、わかを青鞥に手引きしたのは大杉で、それを依頼したのは彼の外国語の師である嘉吉であった。

山田わか・嘉吉は、生前の二人を直接知る人たちによって、一心団体というふうにとらえられ、彼らをして「わか夫人の言は即ち山田氏の思想。山田氏の行為は即ちわか夫人の意思」⁽⁴⁾「わかには常に嘉吉の思想の代弁者であり、同行二人の著作活動であったのだろう」⁽⁵⁾と言わしめることともなった。確かに、『婦人と新社会』が嘉吉の亡くなる前年の1933年に終息し、1934年に嘉吉が亡くなってからは、「わか^の著作活動はたしかに減り、みるべきものはない」との、かつて山田夫妻と親しく交わり、後に『婦人と新社会』復刻版（1993年）の解説も手がけた社会福祉教育家・五味百合子による記述もある⁽⁶⁾。これらはもちろん、「証言」というよりは「印象」に近いものであろうが、わか^の著作が、彼が彼女に伝授したもの、もしくはその反映である、そういう意味で、中味はかなり嘉吉によって書かれたようなもの、ということを抑めかしているようにもとれる。

このわかと嘉吉の「一心団体」は、師弟関係から出発し、夫婦となっても基本的にはその師弟関係を基に育まれてきたといえる。近代文学の揺籃期に、女性が日本語の文字や文体の改革を担った男性の書き手に教えを乞い、彼らの勧める文体——それは多くの場合、女性だけに要求される書き方で、女性作家にとっては縛りとなった——で書き、そうして初めて男性主導の近代文学界に参入できたということを考えても、明治・大正時代に女性が知的な公的活動を独力で始めることは至難の技であり、師としての男性の助けを得なければならなかった。たとえば、前近代から近代への端境期を生きた樋口一葉は半井桃水を師として作家修行を始めている⁽⁷⁾。女弟子が師匠を超えて評価を得ることになったという点で、評論家として活

躍したわかと影に姿を潜めた嘉吉は、一葉と桃水の関係に似ていなくもない。また、夫が妻の著述・研究活動を全面的に支えた例としては、高群逸枝と橋本憲三の夫婦も思い浮かぶ。

しかし、一葉と桃水は夫婦ではなく、一葉の片思いであったようなことも言われており、彼女は桃水の下を離れてから後世に残る傑作を生み出しているし、高群逸枝の場合は、夫とは師弟関係にはなかった。田村俊子は、幸田露伴の弟子であったが、兄弟子であった田村松魚と事実婚をしてから、彼の勧めで朝日新聞の文学賞に応募、それが当選し、人気作家となるきっかけをつかんだ。夫・松魚はある意味で作家・俊子を生み出すという役割も果たしたのだが、そんな夫に、俊子は寄り添うことはしなかった。ほかの『青鞥』の女性たちも含め、この時代の女性にとっては、自我に目覚め、個としての自分を周囲に認めさせることこそが人間として生きることにつながっていったのだ⁽⁸⁾。

ところが山田わかは、傍目からは、裏方に徹した夫から全面的な支援を受け、評論家として、また後には一家の家計を支える大黒柱として、「自立」した女性として自己実現を図ったとも言えそうなのだが、彼女にとって、そうした活動はあくまでも家族の生活、それもさまざまな事情で山田家に転がり込んできた女性や子供も加えた大家族の生活を支えるためなのであって、少なくとも彼女自身の欲求を満たすのが第一義ではなかった。

彼女の雑誌『婦人と新社会』を読むと、「利他主義」「社会奉仕」という思想を女性の生き方の拠り所とすべきだという彼女の一貫した考えが汲み取れる。この考えは、おそらく嘉吉の思想をも反映したものであろうが、そういった人生の行動指針のようなものは、彼女がサンフランシスコで自らの境遇とも重なる恵まれぬ女性たちへの奉仕活動をしていた頃から既にあつたように思われるし、そもそもアメリカに渡るようになったのも、家族の家計を助けたい一心だったからである。また、思想ということに留まらず、日本に帰国後、子供のなかった彼女が親戚の子を養子とするだけでなく、親しい知人をその子供と共にひきとったり、未婚・既婚の若い女性の駆け込み寺よろしく自宅を開放するのに吝かでなかったということな

だから、自分のためでなく、他人のために生きること、その考えを生き方として実践したのが山田わかであったと言えよう⁽⁹⁾。

そういう妻・わかであったからこそ、夫・嘉吉も、喜んで陰の役割を演じたのではないだろうか。博学であった彼は、専修大学で短期間教鞭をとったこともあるが、その時の講義をもとにした『社会学概論 上・下』(1924)と大学紀要への寄稿、ほかには西洋料理の作り方を書いた『西洋料理法大全』(1923)が著作として残されているのみで、あとは『婦人と新社会』に載った数編の海外視察談などが散見されるぐらいである。彼自身の思想形成の跡を辿る資料ともなり得たであろう相当数の蔵書——サンフランシスコ時代は数千冊の洋書の約半分を1906年の大地震によって失い、そのことが日本への帰国を決意させたともいわれている——は、第二次大戦中は戦火による焼失は免れたものの、戦後に生活が逼迫する中で売却されるなどして、現在はほとんど残されていない。自分で著述活動をしなかったのは、五味によれば、長年のアメリカ生活から、日本語が覚束なかった、また日本に帰国したときに40歳を超えていたため、自分よりも若いわかを訓練したほうが良いと考えた、さらに家庭中心主義ともいえる女性論を展開するには女性の手によるほうが妥当であるというような判断が働いた、からではないかとも言われている⁽¹⁰⁾。わかも書いているが、幼い頃に母親を亡くし一家離散の末、わずか8歳の時から働かなくてはならなかったという嘉吉は、40歳でわかと結婚するまで家庭の味を知らずにいた⁽¹¹⁾。したがって、わかによって家庭中心主義の女性論という考えを得るようになったとも想像できる。その上に、嘉吉は前述したような出会いの頃のわかに利他的な素質を見出し、そこに敬意すら覚え、自らの知識や情熱を彼女に託そうとしたのではないだろうか⁽¹²⁾。

3. 大正ロマンスとしての往復書簡

ここに、わか・嘉吉夫婦の関係を象徴するような記録が残されている。それは、1922年5月から半年にわたって、嘉吉が実業家・有島某の通訳として同行する世界一周の旅に出たとき、二人の間で嘉吉が英語、わかの日

本語で太平洋を隔てて交換した手紙である。二人の分を合わせて、残されたものだけでも90通を超える手紙は、二人の孫にあたる山田弥平治氏が現在まで所蔵しているが、わかに関する論文等でその所在について簡単に記述したものを除いては、その詳細がとりあげられたことはない⁽¹³⁾。ただ、後段で触れるが、嘉吉の手紙の一部は、私信としての手紙の体は成さずに、日記形式の旅行報告記として『婦人と新社会』に掲載されている。

この往復書簡には、わかと嘉吉の協働ぶりを示すヒントが含まれていて興味深い。基本的には、嘉吉が道中の無事をわかに知らせること、留守を守るわかと彼女の執筆・講演、家族の様子などを嘉吉に伝えることが目的の私信で、わかと嘉吉に「おとうさん」、嘉吉はわかに「My dearest Waka (最愛なるわか)」とよびかけ、嘉吉の英文の最後は、ほとんどが「Your loving husband Kakichi (あなたの最愛の夫・嘉吉より)」などと書かれており、互いの愛情と慈しみとにあふれている。嘉吉が4月23日に旅の船上で書いた最初の手紙には「昼も夜も、あなたと子供たちは、いったいどうしているんだろうかと、あなた方のことばかり考えています」「私は毎日あなたの側にいるのだということをごまかさないでください」(注：以下、嘉吉の手紙は筆者による日本語訳)とある。この後も、シンガポールから出した最後の手紙に至るまで、毎回必ずわかと家族への温かい思いが綴られ、それと同時に最新の海外事情をつぶさに伝える報告にもなっている。*The Bluestockings of Japan* (『青鞥』) (2007) の著書もあるアメリカ人研究者Jan Bardsleyは、嘉吉の英文レターを要約した未発表草稿に「ひとつの大正ロマンス (恋物語)」というタイトルをつけている⁽¹⁴⁾。Eメールで即座にやりとりができる現在とは違い、手紙を出した後も返事を待つ間に次の手紙を出す、という具合で返信が追いつかず、答えに「時差」があることも時代を彷彿とさせる。

わかの日本語の手紙には、家族の様子に加えて、雑誌『婦人と新社会』の編集およびその他の出版物の進捗状況、講演を行った時の様子などがかなり細かく綴られている。たとえば、嘉吉が船で旅立って間もなく書かれた1922年4月19日の手紙には、

(前段略) 今日いつもの「編集の後」の代りに「世界一周旅行の途に夫を送って」と云う一文を書いて再校もしてしまいました。(後段略)

とある。「世界一周旅行の途に夫を送って」は、前段の注11にも引いたが、『婦人と新社会』1922年5月号に掲載された、嘉吉の生い立ちの説明も含まれた小文で、この中でわかは「世界の殆どあらゆる最新知識に触れてゐる彼と、母國の文字を読むことすらも出来なかつた私とは余りに知力の懸隔が甚だしい御座いました。(中略)彼は私の知力を培養し成長させることを日々に勤めてゐました」と書いている⁽¹⁵⁾。この雑誌が発刊される前からわかを背後から支える夫・嘉吉のことはある程度書かれていたのだろうが、これは『婦人と新社会』では創刊27号目にして最初の、嘉吉を、また二人の夫婦でありながら師弟のようでもあるという関係を本格的に紹介する文である。

それから4月29日付けの手紙には、次のように書かれてある。

(前段略) 昨夜、XXさんが組の済んだ原稿を返しに来て、本は5月10日頃出来ると言っていました。(中略)
私もどうかこうにか仕事を進めていくことが出来ますから御安心ください。(後段略)

これは製作中の『家庭の社会的意義』について嘉吉に報告したもののだが、「私もどうかこうにか仕事を進めていくことが出来ますから」というくだりから、わかと嘉吉と共に雑誌を発刊して以来初めて、嘉吉の手をまったく借りずに編集作業をしたことがうかがわれる。

さらに、彼女の自立ぶりを伝えるようなメッセージがある。5月31日の手紙に、次のように書かれている。

(前段略) あなたにもたれかかってばかり居るときにはあなたから注

入されても、心の奥に潜んでいた力があなたと別れた後にはグングン目ざめて来るのを感じます。これはもう前から予期していた事なのです。たとえば、あなたに読んでいただければ造作ないと思って自分では読めなかったようなものでも、今ではなんの不都合もなく読んでいます。私の心のうちにもあなたの力が充満していますから私は強いのです。決して困るようなことはありませんから安心して下さい。(後段略)

嘉吉が身近にいる時は、自分一人のできるか試そうともしなかったことを、一人でやらなくてはならない状況に追い込まれて、やってみるようになった。それによって、自分の能力を引き出すことができた。もちろん、それも嘉吉のおかげだと手紙には綴られている。

また、二人の協働ぶりを示す記述として、上記のメッセージの直前近くに次のようなくだりがある。

(前段略) 桑港から御送り下さったサンデークロニクルにブォースコンツロールの事があると仰いましたが、あれはむしろセックスコンツロールです。あれを昨日一つの短い原稿にしましたが、何処へ送るかはまだ考え中です。(後段略)

前後するが、嘉吉がサンフランシスコから送った5月5日付けの英文の手紙に、こう書かれてある。

(前段略) これは、前回の手紙の続きです。これと一緒にサンデークロニクル紙Sunday Chronicleを送りましたが、そこに面白いことが書いてあります。産児制限とマリー・ウォルストンクラフトMary Wollstonecroft に関する記事で、これは雑誌に翻訳を載せられると思います。(後段略)

このやり取りの結果が、『婦人と新社会』1922年7月号の「桑港ニュース」と題した欄で、嘉吉から送られてきたサンデー・クロニクル紙記事の紹介文「両性調節の曙光」(p. 48-53)と「ウォルストンクラフト女史の肖像」(p. 53-55)となった。

4. 『婦人と新社会』に示された わかの「自立」

『婦人と新社会』は、1920年3月に創刊され、1934年6月発行の7月号まで続いた。創刊号から1923年12月号まではほぼ毎号エッセーや詩を寄せた原田(斎賀)琴子、創刊年の9月から編集兼発行人となった嘉吉など数人の寄稿者を除いて、わか为主筆の、わかの個人誌である。

創刊以来一貫して、女性の地位を家庭の役割と母性を重視することによって高めていくことを主張し、「社会教育」と銘打って男女双方の倫理・道徳観を啓蒙していくのが『婦人と新社会』の目的であったようである。わかの母性主義は、平塚らいてう、与謝野晶子、山川菊栄に、わか加わった「母性保護論争」(1918年ごろ)から変わらず、彼女は母性の保護を既婚女性の場合は夫に対する最低賃金の保障を通じて、寡婦には国家からの直接支援として要求している。その代わりに、人々の個人主義を排し、個人の社会に果たすべき義務について説いている。

わか加嘉吉と離れて執筆と編集に取り組むことになった1922年5月号から11月号の『婦人と新社会』の誌面には、嘉吉の世界旅行の報告や、彼が各地から送った新聞、雑誌、本の内容紹介が毎号載っている。帰国後の12月号から翌年の1月号を除く4月号までは、嘉吉の署名記事が海外視察談として掲載されている。実は、嘉吉の名が著者として誌面に登場するのは、雑誌が発行された14年間で1929年9月号(第114号)を除いたこの時期だけなのである。

わか加嘉吉の影響を受けながらもあくまでも自分で原稿を書いていたことの証、また嘉吉自身が表に出てこなかった理由が、この時期の誌面に表れている。7月号の編集後記でわか加は、嘉吉の海外見聞の報告(つまり、わか加への手紙)が英文で書かれているので、それを日本語に訳して載せる、

また嘉吉が日本語よりも英語で書くことのほうに馴染んでいた、と書いているが、これは、『婦人と新社会』の論文（日本語）がすべてわかの手によって書かれたものであることを、あらためて示唆するものといえる⁽¹⁶⁾。さらに、嘉吉署名の日本語で書かれた海外視察談も、文章はわかの手がかなり入ったものか、あるいはわかによって書き起こされたものであろうと読者に想像させることにもなっただろう。むろん雑誌の創刊時から、主筆はわかであることがうたわれており、嘉吉の名は出てこないのだが、嘉吉がどうやら日本語文を自在に操るわけではないということから、ここに嘉吉の考えをわかか日本語で書き起こすという二人の協働の形が浮かびあがっていると見えよう。

また、嘉吉名の原稿が誌面に現れたことによって、夫婦の物の見方が同じであることもより一層明らかになっている。また、嘉吉の登場する誌面では、わかによる関連記事が、嘉吉名の原稿によって披瀝された考えを敷衍したり補ったり、応用したりしたものであることもわかる。たとえば、わかか1923年2月号の「保守主義と進歩主義の歴史的内容」という記事の中で、フランスとイギリスを例に、革命主義は保守主義で斬新主義がかえって進歩主義である、ということを説明しているところだが、それによると、フランス大革命以来の政治的変動は、感情主義に流されたものであり、知的熟考を欠いている。そこには結果として進歩が見られなかった。しかしイギリスは、18世紀の名誉革命後は政治体制の変動はなく、国民生活も比較的安定していた。これを一般に保守主義と見なすが、そこでは産業等の著しい進歩があった。これを受けて、1923年3月号に嘉吉の署名記事「變化を求めて變化せざる仏蘭西」では、ボルテール、ボアロー、ベルレーヌ、と思想・芸術上の変化は多いが、この国では哲学と芸術の国民的関心が高く、人道主義的というフランス精神は古くから変わらず、したがって、フランスは常に變化を求めながら變化をしない国なのだということに説明が行き着く。嘉吉の文は、「變化せざるフランス」について必ずしも順序良く論理立てて説明しているものではない。本来ならば、わかか書いたものを跡付ける目的があったのではないかと思われるのだが、むしろこの発想につ

いて理解したわかが、自分の書くものでまずわかりやすく読者に紹介し、のちに嘉吉が歴史的な経緯の説明でフランス思想家の名を数名とりあげた、というふうにとらえられる。つまり、嘉吉から与えられた発想を日本語文に書き起こすわかは、嘉吉の考えについてのよき解説者であったということが言えるだろう。

4. まとめ

今回、嘉吉外遊中の1922年に彼とわかによって書かれた往復書簡と雑誌記事を中心に、二人の協働性と、わかの手書きとして、また女性としての自立性ということについて二、三の事例を考察した⁽¹⁷⁾。二人が「一心同体」と言われるだけの根拠を、数少ない嘉吉の署名原稿、それと一緒に掲載されたわか原稿、雑誌の編集後記などの中を探してみたところ、二人の書き物については相互補完性ともいえる関係が見出された。と同時に、『婦人と新社会』では、主筆たるわかが、嘉吉の英語の手紙などを翻訳して載せ、また彼から送られた英字紙・誌や文献も日本語に訳していることから、嘉吉の日本語による視察談も彼女によって書き起こされた可能性があることがわかった。この限られた資料だけで何かを判断することは難しいとはいえ、英語から日本語への翻訳作業を含め、わかが嘉吉からアイデアを得ながら日本語文に書き起こすという協働作業を担っていたであろうこと、それは嘉吉に追随するというよりは、むしろ彼の考えをまとめ、読者へと導くことであり、そこに日本語評論の書き手としてのわかの自立性がうかがわれるのである。

注

- (1) 「母性保護論争」とは、1918年に与謝野晶子、平塚らいてうの間で女性の育児と就労の両立を個人の手に委ねるのか国家に求めるべきなのかをめぐる始まった論争で、その後山川菊栄、山田わかが入参し、1919年まで続いた。
- (2) 嘉吉は『婦人と新社会』1929年9月号(第114号)の巻頭に「My three hopes (三つの望み)」(わか日本語に翻訳)という短い英文を載せているが、その中で「第一の

- 私の望みは、婦人言論界の第一線に私の妻を立たせることであった。そして、それは八分通り成功した」と述べている。
- (3) わかの前半生、特に滞米時の経験については、記述に奇を衒う嫌いがあるものの山崎 (1972) が詳しい。わか母性保護主義や社会事業に関する実践と思想については、佐治 (1974)、五味 (1980)、五味監修 (1993)、海妻 (2004)、今井 (2006) などを参照されたい。
- (4) 福島 (1935)
- (5) 五味 (1980)
- (6) 五味 (1980)
- (7) 明治生まれの女性作家たちは、女性の書き手として、男性作家が「女らしい」と認められた文体で書くことを半ば強要された。このことを、関礼子は女性に押し付けられた「女装文体」とし、たとえば、樋口一葉は、師の半井桃水から、登場人物の女のせりふが荒っぽいと指摘され、それらを「女ことば」に書き直さざるを得なかった (関 1993)。筆者は、一葉が「女装文体」を自分の文体として昇華させ彼女の文学世界を作っていったことを論じている (Saito 2010)。
- (8) 田村俊子と夫・松魚の関係については『あきらめ』や『生き血』をめぐる評論などに紹介されているが、今回は渡邊編 (2005) を参照した。
- (9) わかと嘉吉の生涯については、前述の五味 (1980)、五味監修 (1993) による。
- (10) 五味 (1980)、五味監修 (1993)
- (11) 「世界一周旅行の途に夫を送って」五味監修『婦人と新社会』第3巻1922年5月号 (第27号) p. 59
- (12) つまり、わか著作に一貫して見られる利他主義は、わか自身からと同時に嘉吉の思想の核を成してもいたとも言えそうである。そのことを示す資料については、これまであまり検討されていないのだが、それについては、次回の考察の対象としたい。
- (13) 先ごろ筆者は、University of North Carolina准教授のJan Bardsley氏を通じて手紙の存在を知り、既に嘉吉の手書きの英文をタイプし、その要約文を仕上げている Bardsley氏から、その貴重な記録を譲り受けた。また、孫の山田弥平治氏は、わか日本語の手紙をタイプし冊子として私蔵されている。資料は山田氏のご理解とご

厚意により、今回に限り使わせていただいた。

(14) この未発表の要約の原文は英語。彼女の友人による日本語訳もある。

(15) 「世界一周旅行の途に夫を送って」五味監修『婦人と新社会』第3巻1922年5月号
(第27号) p. 59

(16) 五味編、『婦人と新社会』第3巻1922年7月号(第29号) p. 62

(17) 今回は、二人の思想そのものについての詳しい考察は扱わなかった。わかか書いている「斬新主義が進歩主義」というところに、その考えの片鱗はうかがえるのだが、二人は革命主義などの過激思想を嫌い、雑誌には社会主義の信奉者を諷める記事が頻りに掲載されている。山田夫妻を紹介する研究論文の中には、嘉吉を漸進主義、わかかを国家主義として、二人の思想の違いを指摘するものもあるが、筆者はそのような二分法はできないのではないかと考えている。それについては、稿をあらためて論じてみたい。

参考文献

- 今井小の実(2006)「山田わか——苦難の半生から母性保護運動の旗手へ」室田保夫編著
『人物でよむ近代日本社会福祉のあゆみ』ミネルヴァ書房
- 海妻径子(2004)「<稼ぎ手としての男性>要求から<愛国主義>へ——山田わか女性の
保護論」『現代のエスプリ:マスキュリティ/男性性の歴史』No. 446 pp. 173-183
- 五味百合子編著(1978)『社会事業に生きた女性たち その生涯と仕事』ドメス出版
- 五味百合子(1980)「山田わか——人と歩み」『社会事業史研究』第8号 pp. 69-84 社
会事業史学会
- 五味百合子監修・解説(1993)『婦人と新社会 第1巻～第7巻』復刻版 クレス出版
- 佐治恵美子(1975)「山田わかと母性主義」『お茶の水史学』18 pp. 15-30 お茶の水女子
大学比較歴史学講座読史会
- 関礼子(1993)『姉の力 樋口一葉』筑摩書房
- 福島四郎(1935)『婦人界三十五年』婦女新聞社
- 山崎朋子(1978)『あめゆきさんの歌——山田わかの数奇なる生涯』文芸春秋
- 山田わか・嘉吉による日・英語の往復書簡(1922)山田弥平治氏私蔵
- 渡邊澄子編(2005)『今という時代の田村俊子——俊子新論』至文堂

Bardsley, Jan. (2007) *The Bluestockings of Japan: New Woman Essays and Fiction from Seitō, 1911-16*. Ann Arbor, MI: Center for Japanese Studies, University of Michigan

Bardsley, Jan. A Taishō Romance: Travel Letters from Yamada Kakichi (1865-1934) to Yamada Waka (1879-1957). Unpublished paper.

Saito, Rika. (2010) Writing in Female Drag: Gendered Literature and a Woman's Voice. *Japanese Language and Literature*. No. 2, Vol. 44: in print

(さいとう りか・ウェスタン・ミシガン大学教員)